

令和2年度実務者セミナー

『社会的マイノリティに配慮したコンテンツ制作』

～アイヌ民族についてのケーススタディー～

開催日：2020年12月8日

講師

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授

北原モコットウナシ氏

■立場の違いによるギャップへの気づき

単一の価値観を標準とした表現は、抑圧や不快感を生み出すものになります。日本社会の中で標準とされているのは、異性愛者で健康な和人男性。ここから外れる立場にあるアイヌ民族や女性、同性愛者などとは社会の見え方が異なります。表現に問題のあるコンテンツがたびたび出てくるのは、立場の違いから生じるギャップに制作者が気づいていないためです。「アイヌらしさを大事にしてね」「現代にこそアイヌの考えが必要だよ」「アイヌ語に興味があるから何か言って」と発言する人はこうしたギャップに気づいていない。「女性らしさを大切に」「現代にこそ女性の視点が必要だ」「女性らしい言葉を使って」と女性が言われた場合、その多くが違和感や反感を覚えるでしょう。アイヌも前述の発言に対し、同様の感情を抱きます。アイヌに対し「ロマンを感じる」と言う人もいますが、目の前にいる人を見て話をしていないような、アイヌの存在を過去に位置づけているような印象を受けます。「不幸な歴史があったよね」と言う方は、アイヌに関する問題は解決済み、過去のできごととしてとらえている。アイヌにとって、植民地化の状況は今も続いています。明治以降の日本政府の政策によって言語、生活習慣、価値観、歴史、親族とのつながりなどさまざまなものが崩壊しましたが、現在もほとんど回復されないままです。

ドラマでは今も昔もアイヌ女性と和人男性の恋愛、悲劇的な死というパターンのストーリーがつくられています。これはアイヌに限らず、入植者と非入植者、あるいは富者と貧困層など異なる立場の人物を描く作品によくみられるものです。優位な社会に身を置く男性は、作品中では公正で紳士的にふるまい、女性も好意を寄せます。すべてのマジョリティがこの男性のようであれば問題はありますが、残念ながら現実はそうではありません。こうした作品は、慎重に描かなければ「マジョリティにも良い人物はいた」と強調することで、現実にある問題から目をそらしてしまう危険性があります。アイヌと和人について言えば、まるでアイヌが和人の入植を受け入れたかのような、そしてすでに滅びたかのような誤った印象を与えかねません。アイヌに関する問題は現状では何もないという誤解を招く恐れがあります。

■求められる入念な文化考証

異なる宗教・文化をコンテンツで取り上げる際、その扱いには誰もが慎重になると思います。ところが、アイヌの宗教や文化に対しては、カムイをキャラクター化して番組ナビゲーターにするなど、尊重を欠く扱いが多々見られます。神をキャラ化する発想は他の宗教に対してならまず起きないでしょうし、もし行えば大きな批判を呼ぶことは想像に難くありません。

アイヌ文様については、しばしば過剰な意味づけがされることがあります。魔よけ、家系を現わすなどの説明は人々の関心を引きますが、一種の都市伝説のようなもの。数年前に行った研究では、意味づけは戦後に広まったことが分かっています。また、同時期に広まった自然保護思想や、今の日本社会に流布する宗教的・スピリチュアル的なものを好む機運から、生活文化や儀礼の意味づけがなされることがたびたびあります。文化・儀礼の解釈改変、伝承の創作は行わず、アイヌ文化の適正な紹介・理解に努めましょう。

アイヌ文化に対し、平和、自然、素朴などの表現を過剰に行うことも避けるべきです。一見好意的に感じる言葉が並びますが、そこには偏見・バイアスが含まれている。特定のイメージ・役割の固定につながらないように注意しましょう。

アイヌ語をコンテンツで使用する際は、正確な表記・発音を心がけて下さい。英文を使う際、誤りがないかネイティブスピーカーにチェックしてもらうのと同様、アイヌ語についても確認を行って下さい。

人名にまつわることにも注意すべき点があります。アイヌ文化において、名前はとても大切なもの。近代以前は、名前を人に簡単に教えることはなく、名前を呼ぶこと自体あまりなかったと言われます。作品の中で名前を呼ぶシーンがあるのならば、それはアイヌ文化風の味付けをした日本文化の話になってしまいます。また、アイヌ文化では同名使用を避けるため、創作物への実在の人名転用はその名誉・人格を傷つけることとなります。なお、アイヌの文化復興や社会運動、研究などを報道する場合は、取材に協力した個人・団体の名を明記すべきでしょう。

今、性別や人種・民族・宗教などに関わる差別・偏見のない中立な表現を目指す「ポリティカル・コレクトネス」という概念が世界中に広がっています。特定の立場に偏らず、普遍的な言葉を選び、誰もが違和感のない表現を心がけることが大切です。北海道の古称・蝦夷地は和人によるもので、さらに“蝦夷”は野蛮人を意味するため、使う際はアイヌ語地名のヤウンモシリまたはアイヌモシリを併用しなければフェアではありません。メディアでは「開拓」という言葉もよく使われますが、アイヌ民族にとっては生活破壊や土地・資源の収奪など喪失の根源と結びつく行為で、和人のように前向きな意味としてとらえることはできません。先端研究を表現するキャッチコピーなど、使う場面や文脈によっては必ずしも悪く受け取る必要はないのではという意見もありますが、公共の場では不適切な表現になり得る言葉です。某広告は和人の立場での開拓を強調したコピーが大きな批判を呼びました。

■情報収集や監修依頼など十分な準備を

アイヌ民族関連のコンテンツを制作するにあたっては、十分な研修と情報収集が大切です。監修依頼など当事者の参画は企画段階から求めるのが望ましいでしょう。アイヌの視点だけ取り入れればよいということではありません。アイヌを取り巻く環境の中にいる和人も当事者です。さまざまな立場の人がチェックすることで、見落としに気づいたり、発想や表現の幅を広げたりといった効果が期待できます。以前、あるアニメ作品でアイヌ語のセリフ作成と声優の発音指導の依頼を受けました。時間を十分にとって下さったので、スタッフの方と意見交換しながら自然な言い回しのセリフをつくることができました。アイヌ語のシーンは一部でしたが、制作サイドの誠実な姿勢を感じました。

なお、北海道観光振興機構の「アイヌ文化・ガイド教本」では、望ましい表現と避けるべき表現をまとめておりますので、オンラインでぜひご参照下さい。